

●事例紹介●

弘前大学における就職支援について

須藤 新一

(弘前大学学生就職支援センター長)

一 はじめに

初めからわたくし事で恐縮であるが、私は高校時代に国語の教科書で丸山真男氏の「『であること』と『すること』」と題する文章を読んだ。岩波新書の『日本の思想』を買って、青年期特有の見栄をはったものである。

弘前大学学生就職支援センター（以下センターと略記）の初代センター長に任命された時、頭に突然飛び込んで来た語句が、その「『であること』と『すること』」であった。私はこの語句を足掛かりにセンター業務を纏めてみようと考えた。

例えば、学生が職業としての「銀行員であること」を頭に描けても、さて、日常業務としての「銀行員のすること」を具体的に把握できるか。すなわち、職業としての抽象的な「『であること』を十分知っていても、仕事としての具象的な「『すること』」を理解しているか。理解しているなら、我々センターの存在理由はないことになる。理解されていない場合が多いがために、就職後、こんなはずではなかった、と職を辞めてしまふ可能性が高い。

現在、大学卒業後三年間で三割の学生が職を辞すと言われているのは、この「『であること』と『すること』」の間に大きな空隙が存在するためと考えられる。従って、両「こと」の間を如何に埋めるかに我々センターの主なる使命が

懸つていると言つても言い過ぎではない。

であるならば、先ず第一段階では社会や職業に関心を向けてもらい、第二段階で、両「こと」の間を文字情報、音声情報、そして直接行動によって各々の学生に自発的に埋めてもらうしかない。以下では、この「中心となる語句」を基に、平成一六年四月一日に活動を開始したばかりのセンターの概略を、(一)センターの構成、(二)目標、(三)事業、(四)年度別計画、そして(五)今後の展開、の順に簡潔に説明する。

二 センターの構成

センター長（兼任）の下に、各学部長から推薦された各々一名の兼任教員がおり、その兼任教員は各学部の就職関連委員会の委員長を兼ねている。

また、常勤の職員が二名おり、一人は学生の相談を主に担当する。採用以前は民間企業（商社）で長い間物流・貿易・販売関係の業務を行ってきた。もう一人は就職情報処理関係を主に担当し、これまた民間企業での経験を活かしてセンターのホームページに最新の情報を発信している。

さらに、この十一月一日からは副センター長としてこれ

までにない新しい役割を担う専任教員が採用される運びになっている。この専任教員には、我々兼任教員にない発想と行動力を期待している。

また、学生課には就職支援担当の職員がおり、センターと密接に連携している。

三 目標

大きく分けて五項目ある。

(一) 学生の社会・職業意識の涵養

学生に負担感がなく、気が付いたら充分就職活動の準備ができてほしい。そのためには、大学での四年間を総合的に捉え、各学年次でのセンターの取組を有機的に連結することが肝要である。我々の意図に学生が関心を寄せ、そして共感するように、文字、音声情報を効果的に組み合わせる。さらに、音声情報も最初は全学部多数対象から学部指定の少数対象へ、最後には個人に対して適切に提供できるような流れを考える。

(二) 就職情報の収集・集積と提示

センターが就職情報の図書館の役割を果たす。文字情報

が主体となる。

(三) 情報分析と対策立案と実施
 全学及び各学部の戦略を練り、実践する。

(四) 親身な相談
 学生との面談が主で、学生との信頼関係を構築するべく専任の職員が対応している。「であること」と「すること」の間を言語を用いて埋めることが要務の一つである。

(五) 求人開拓
 地元地域のみならず東京をも視野に入れ、足を運んできめの細やかなPR活動を心掛ける。

四 事業

具体的事業を前記目標ごとに紹介する。

(一) 全学部二・三年生を対象とした「キャリア教育」二単位をこの四月から立ち上げた。授業の特徴は、非常勤講師として学外から社会人一名を招き、実社会の息吹を学生に体感させることである。講師の人は弘前商工会

議所の全面的協力を得てなされた。この「キャリア教育」の受講以降、学生が階段を一步一步昇るように会社見学、各種ガイダンス、業界研究会、合同企業説明会が開催される。これらに学生達が参加することによって実際の就職活動が主体的にできるようになることを期待している。これまでの実施結果は、「キャリア教育」受講者が一六五人、また、業界研究会参加者が延べ四九四人であった。また、各種ガイダンスには二〇〇〜二五〇人が参加していた。

(二) 専任の担当職員が、他大学での研修体験や学生からの要望等を踏まえて、情報管理方法の見直しと検索システム構築等を行っている。希望する学生には求人情報をメール配信することも検討している。また、センターのホームページに最新情報を載せている。

(三) 隔週ごとに開催されているセンター会議でセンターを取り巻く問題に迅速かつ的確に対応している。各学部での事情を考慮しながらセンターで対策を決め、各学部委員会がきめ細やかに実施しやすいようにしている。

(四) 専任の相談員が月平均四五件のペースで対応している。「二期一会」をモットーに、一人の学生の相談に最低でも一時間半くらいをかけている。これによって、近年社会問題化している新卒者の早期退職の減少が見込まれる。

(五) これまで、弘前市を中心に県内六二社を訪問した。今後訪問範囲を広げる予定である。弘前大学はこの五月東京八重洲口に東京事務所を開設した。この事務所及び分室を活用し、学生が会社見学やOB・OGとの懇談等を体験することを企画している。このため、東京同窓会の協力が必須で、現在検討が進行中である。在学生と同窓会会員とのつながりが太くなってくれることを望んでいる。

今後、副センター長にも民間企業への対応を積極的に推進してもらうことにしている。

五 学年度別計画

表1に各学年度ごとの事業例を示す。

一年生はまず大学生活に馴染むことが最優先されるべき

である。就職に関することは早ければ早いほど効果的であるとの意見も聞かれる。しかし、学生が自分の足場をしっかりとは安定させないと、将来のことに思いを馳せる余裕が生まれないと考えられる。従って、入学時のガイダンスや各学部ごとに開催される保護者懇談会(学生の保護者に大学にお出で頂き、学業成績、就職状況を説明する会)等で、我々センターのことを概略的に紹介するに留める。

学生が自分の将来のことを考える機会を初めて持つのは、二年次の前期に開講される「キャリア教育」を想定している。この授業を聴講することにより「社会」に目を向け、社会における自分の位置付けに関心を持ってもらう。この授業を聴講し単位を修得した学生が、二年次の冬休みに東京地区の会社見学会とOB・OGとの懇談会を経験す

表1 学年ごと事業

1年		大学生活に馴染む
2年	4月	キャリア教育開講
	12月	会社見学・同窓生交歓会
3年	6月	就職ガイダンス(状況分析)
		国家公務員採用試験ガイダンス
	8~9月	インターンシップ
	10月	業界研究会
	11月	就職ガイダンス(自己分析、面接等)
	2月	合同企業説明会
4年	4月	就職活動

る。この見学会は、三年次
終わりから各自が独自に就
職活動を行うことができる
ようにするための下準備を
兼ねている。

三年になると、本格的に
各種ガイダンスが開始され
る。前期は一般的な前年度
の状況分析等を主としたガ
イダンスでこれは全学部の
学生を対象に行われる。た
だし、学部特殊性がある
場合は、センター会議での
協議に基づいて、学部の委
員会が独自にガイダンスを
開催することもある。

表2 インターンシップ体験者数・受入企業数(延べ数)

区分	平成12年度		平成13年度		平成14年度		平成15年度	
	体験者数	受入企業数	体験者数	受入企業数	体験者数	受入企業数	体験者数	受入企業数
人文学部	6	5	10	10	39	17	52	22
教育学部	0	0	0	0	11	8	4	4
理工学部	3	3	10	9	7	6	6	5
農学生命科学部	1	1	4	4	4	4	3	2
計	10	9	24	23	61	35	65	33

夏休みにはインターンシ
ップが行われる。表2にここ四年のインターンシップ参加
者数を示す。これまでの参加者数が多いとは言い難い。

後期が始まるやいなや、業界研究会が開催される。五業
界から一社ずつお出で頂き、具体的仕事の内容を説明頂く。

(一) 学生の自発的行動

センターは情報と場を提供できるが、それ以上は各自学
生の行動にかかっている。機会を適切に捕まえて、自ら行
動を起こして人生設計に取り組んで欲しい。

(二) 保護者の理解

学生の保護者にセンターの存在理由をことあるごとに発
信し、我々の意図を理解頂くことも重要である。保護者懇
談会を効果的に活用する。大学の後援会組織を通しての情
報提供も期待したい。

(三) 地域の協力

既に弘前商工会議所の協力を得ているが、その他の市の
協力をも仰ぐ必要がある。さらに、青森市にあるジョブ・
カフェとの連携も図られている。

(四) OB・OGの理解

就職活動での協力はかりではなく、各種ガイダンス等セ
ンター事業への積極的参加を依頼したい。

「であること」と「すること」の間隙を埋める直接的事業
の一つである。

また、インターネットを用いての情報収集法や自己分析
及び希望企業への登録方法等もガイダンスされる。さらに、
後期の期末試験終了直後にセンター主催で合同企業説明会
が弘前市で開催される。二〇〇社ほどの企業の人事担当者
が一堂に会し、本学学生と面談する会である。この合同企
業説明会は一昨年度、理工学部で開催され、昨年度は全学
部で開催された。弘前市は東京と距離的に離れており、学
生の就職活動に不利であるとの常識を緩和させる取組であ
る。

六 今後の展開

(一) 教職員の理解

センターの業務が円滑に行われるには、センターと各学
部との間に太い網が連結され、さらに各学部内で委員会を
経て各教員に網が行き渡っていることが望ましい。就職活
動している学生と普段接触が一番多いのは研究室やゼミの
教員である。学生の状況把握及び助言が大事となる。

七 おわりに

何ごとにつけても「動機付け」の有無が結果のよし悪し
の決定的要因となる。学生の人生設計においても同様であ
る。本流である勉学への意欲を持った上で、社会性を身に
付け、職業観を育ててもらえるように、大学の各部署が連
携を取りながら学生の動機付けを喚起しなければならな
い。センターが手助けできるのは社会性や職業観の涵養の
部分が主であるが、センターも学生一人一人に大学生活で
の動機付けを持たせることができれば、先に述べた「であ
ること」と「すること」の乖離を少なくすることも比較的
容易となる。

以上、我々センターのことを概略したが、弘前大学は入
試関係から教務を含めて就職まで総合的に学生支援に取り
組んでいる。この弘前大学の採った方向性は正しいものと
考えられるが、具体的方法に多くの改良点を含んでいるか
も知れない。皆様からの忌憚のない御意見、御助言をお願
いしたい。